

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報



特集 ブラジルコーヒーの魅力再発見

- ・ブラジルコーヒーの奥深い魅力
- ・「世界一」へのイノベーション
- ・品質にこだわるカフェ・ボンフィーノ

あの町この町
ラブラス Lavras



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

新規会員募集中！

詳しくは P21 をご覧ください。



三井物産株式会社 www.mitsui.com



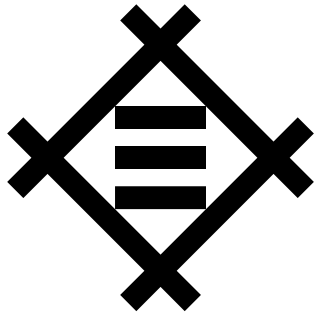
世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]
鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。
鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]
貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。
MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

[Business innovation-3]
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。
オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

あの町この町 ラブラス [本吉祐大]	3
ブラジル・ナウ 二年目のボルソナロ大統領と国体の行く末 [村田俊典]	5
【特集】ブラジルコーヒーの魅力再発見 ブラジルコーヒーの奥深い魅力 [玉川裕子]	6
【特集】ブラジルコーヒーの魅力再発見 「世界一」へのイノベーション [江坂喜達]	8
【特集】ブラジルコーヒーの魅力再発見 品質にこだわるカフェ・ボンフィーノ [青木正登]	10
ゲノム免疫生物学とは 私の研究テーマについて [アンセルモ鎌田]	11
ブラジル現地報告 二極化対立の背景 [深沢正雪]	12
連載・日系企業シリーズ第64回 コマツのブラジルにおける取り組みを振り返って [岡田俊郎]	13
連載・ビジネス法務の肝 新型コロナウイルス感染症への法的対応 [柏 健吾]	14
連載・税務の勘どころ タックストランスフォーメーション [マリエニ・コウチーニョ/吉田幸司]	15
エッセイ サンバの魅力に憑りつかれて四半世紀 [木幡昌敏]	16
ウーマン・アイ ペルナンブーコ州ペトロリーナ奮闘記 [唐木グラッサ]	17
ジャーナリストの旅路 お父さんが新聞記者を辞めたわけ [朴鍾珠]	17
連載・文化評論 ジョアン・カブラル・デ・メロ・ネト 生誕100周年を迎えた外交官詩人に改めて脚光 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
キャンパス・コラム バスの中で [伊與部洋樹]	19
新刊書紹介	20
連載・ブラジルあれこれ BRASIL para principiantes	20
協会からのお知らせ	21



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「スペシャルティコーヒー豆として日本で売られている「さくらブルボン」。産地はミナスジェライス州、標高千メートルを超す農園だ。ナッツのような香ばしさに柑橘系のさわやかな風味。コーヒーの楽しみ方もワインのよう。」
(永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。www.hikarunagatake.com)

ラブラス Lavras

ミナスジェライス州南部はコーヒーの一大生産地域であり、コーヒー業界では南ミナス地域と呼ばれている。その南ミナス地域を目指してサンパウロからフェルナンディアス街道でペロオリゾンチ方面に車を走らせること約5時間、道路沿いにちらほらコーヒー農園が見えてくるあたりにラブラスの町がある。人口はおよそ104,000人、町の中心にはUniversidade Federal de Lavras、通称UFLAと呼ばれる巨大な連邦立大学がある。娯楽といえば小さなShoppingにスクリーンが2つの映画館がある程度の小さな町ではあるが、週末にはあちこちのRepúblicaと呼ばれる学生寮で夜な夜なFestaが開かれる、賑やかな学生街である。



▲Lavras全景

パウリスタの多くにラブラスについて尋ねても、聞いたことがないという回答がほとんどであるが、コーヒー業界では非常に有名である。町のランドマークであるUFLAは、元々1908年に設立されたESAL(ラブラス高等農業学校)と呼ばれる農業技術学校を前身に持ち、100年以上の歴史を誇る。1994年に連邦立大学化された後は規模を急速に拡大させており、今では約1万3千人の学生と2千人の教師・関係者を有し、町の人口の約15%が大学関係者である。

UFLAでは前身の「高等農業学校」の性質を踏襲し、農学や食糧生産工学関係の教育、研究が非常に盛んである。その中でも特にコーヒーの研究には特に力を入れており、育種、病理、栽培、加工、焙煎など、あらゆるコーヒー生産のバリューチェーンの専門家が日夜研究を行っている。卒業生も大手農薬メーカーやCOOPERATIVAと呼ばれる農業組合に就職したり、大農園の農業技師として働いたりする者も多く、農業界ではエリート養成校となっている。教育・研究レベルの高さから、ブラジル大学ランクのトップ10に選ばれた実績もある。



▲UFLAの様子

大学の活動を外向きに広げる動きも活発で、近年は国外からの留学生も多く受け入れている。コロンビアはじめ南米の国々から来ている者が多いが、直近ではアフリカや、アジアからの留学生の受け入れもあり、国際色を加速させている。加えて、大学敷地内にLavrasTECと呼ばれるオフィスビルを建設中であり、企業連携への注力も進めている様が見て取れる。世界的に産業構造の変化はあれども、ブラジルにおいてはまだまだ農業が一番の稼ぎ頭であることは間違いない。ラブラスを中心にブラジルの今後の農業分野での技術革新が進んでいくことが、今から非常に楽しみである。



本吉祐大 (サントリーグローバルイノベーションセンター(株))

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。毎年、アジア主要国のトップクラス大学で学ぶ現地学生の日本企業就職を支援。各国での企業説明会や、日本で学ぶ外国人留学生のための就職支援など、グローバル人材を求める日本企業のニーズにお応えしています。



日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
<https://career.nikkei.co.jp/>

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。



日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES
<https://www.nikkeihr.co.jp/executive/>

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



「日経ビジネス 電子版」
会員数：約260万人

仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

二年目のボルソナード大統領と国体の行く末

新型コロナウイルスが世界を震撼させており、ブラジルも今、医療体制崩壊の危機にある。ブラジルがこの危機にどのように立ち向かうか、乗り切れるかどうか。あくまでも物語の序章の時点で結論を予想するのは困難であるが、いくつか鍵となるポイントを私なりに纏めてみる。

私の友人でブラジリア事情に詳しい人物に今年このような話を聞いたことがある。「ルセフとボルソナードは左と右の違いこそあれ、人間の本質は似ている。ただ、大きく違うのは、ルセフの場合、何か発言すると市場は反応するが、ボルソナードの場合市場は反応すらしない。」この話は、今のブラジルを理解するうえ幾つかの大切なポイントを言い当てており、コロナ危機下で、それはさらに鮮明になってきている。

人間の本質の部分は、人の話に耳を貸さない、取り巻きだけを重用するというようなリーダーのスタイルを述べているのだが、市場の反応が決定的に違う理由は、連合大統領制(議会を纏めるために幅広い党との連立を形成)を敷いたルセフ政権(初期)とそれを否定してスタートしたボルソナード政権の意思決定と立法化の機能部分である。

ご存知の方も多いと思うが、ブラジルの大統領には事前の議会承認を前提としない緊急の立法権限(大統領暫定令)があるとはいえ、その有効期間である60日間(さらに60日間の延長が可能)で、下院・上院の事後承認が得られない場合は失効する。従って、時間との兼ね合いで暫定令こそ発令するケースはあるものの、承認を得る過程で国会対策如何によっては内容が変更される事もあり(朝令暮改に終わるケース)、予め議会承認の見込めない法案は自分勝手に出せないのである。

汚職の土壌となる連合大統領制との決別は志高い取り組みであるし、Bancada とよばれる政策に共鳴する議員連盟を纏めあげ立法院を動かしてゆく事に就任当初は期待感もあった。しかしながら、期待された年金改革法案については実に半年を要したのである。私が見る限り、法案はマイア下院議長のリーダーシップで通過したと言っても過言ではない。

また、この危機下では、上院・下院が一枚岩となり貧困層救済法をスピード可決し大統領に承認を迫った。まさに、ボルソナード大統領は、実質無力であることが証明されたと言っても良い(クーニャ下院議長との関係が悪化したルセフの末期と同じ)。

また、ボルソナード大統領(経済擁護第一主義=隔離政策反対)と意見の違う各州の知事(医療体制確立までは隔離政策必要)やマンデッタ保健大臣との確執は毎日メディ

アで大きく取り上げられているが、大統領は連邦令を出すことも(最高裁判所が連邦令を破棄するのが見えている)、保健大臣更迭も出来ない。ゲデス大臣を中心とする経済チーム、国民の人気の高いモロ法相と司法なども、大統領抜きで国を動かし牽制している。国家の重大な危機を前に、行政・立法・司法の三権がリーダー(大統領)不在でも機能している。不思議な国だ。

国民の連帯意識(Solidarity)も目を見張るものがある。今後物資不足や貧困地域での感染拡大などを背景に、国民の怒りが暴動を生むような事もあるかも知れないが、今回は危機に立ち向かう国民の一体感を感じる。何かが違う。教育水準向上が生むものなのか、メディアの効果なのか、確固たる理由は分からないが、10年、20年前とは明らかに違う。

隔離政策に素直に従う国民、不足気味の医療物資の製造に取り組む中小企業、生命線とも言われる生活物資を運搬するトラック運転手を炊き出しで応援する街道沿いの人々、貧困層に食料を集めて配布するボランティア。ブラジルが一つとなってこの危機を乗り越えようとしている。共感(Empathy)が共感を、国民一人一人の行動が好循環となっている。

ブラジルのGDPの約20%を占めると言われる、アグリビジネス関連産業は今回のコロナ危機の直接の影響はない。また、食料輸出部門はリアル安を背景に好調である。世界の需要も大きく落ち込むこともないであろう。一方で、製造業の中心である自動車産業やサービス業は大きな痛手を被ることになる。経済省が6000億リアル以上の各種支援策を発表しているが、今年度の経済成長率はマイナス3-5%と足元では予想されている。

金融市場に目を転じると、インフレと市場金利が低水準である事は、不幸中の幸いである。政府債務も金利低下による効果(年間1200億リアル)を財政出動に向けられる余裕が生まれる、金融機関もストレス耐性が高いので、これが金融危機につながる事はないと考える。

ブラジルは、あらゆる危機を乗り越えて今がある。ブラジル人の危機耐性は高い。きっと、この難局を乗り越えるものと信じている。民主主義は国民主導で守られる。ただ、税制改革などブラジル成長の鍵となる改革法案は、次の大統領に委ねられる公算が高い。

村田俊典(ブラジル日本商工会議所 会頭)



●特集● ブラジルコーヒーの魅力再発見

ブラジルコーヒーの奥深い魅力

ブラジルの
は
美しき夜明けが機より見ゆ
熱き大地に熟すカフェの実

ブラジルではかつて緑の金ともよばれたコーヒー豆は貴重な作物として品質がしっかり担保され輸出される。コーヒー農園全盛時代に始まり長きにわたってその生産高で世界トップをゆくブラジルコーヒーは、国内消費はもとより輸出高でも国の経済をけん引している。サントス港で荷積みされることからサントス豆の名でも知られるブラジルコーヒーの奥深い魅力をいくつかの視点から探りたい。

ブラジルの勢い

私たちが飲んでいるブラジルコーヒーは生豆の段階で厳しい審査を通過している。審査を行う鑑定士は、豆に向き合い、豆を見つめ、視覚・嗅覚・味覚そして研ぎ澄まされた感性を通して厳格に生豆をチェックする。連邦政府の機関であったIBC(ブラジルコーヒー院)が創立の歴史に幕を下した1990年以降、コーヒー鑑定士の育成はサントス商工会議所に講座型式で引き継がれた。2000年7月にその講座に参加した私は、南米大陸をめざして海を渡った日の翌朝に見たグアルーリョ国際空港の輝く夜明けを鮮明に記憶している。以来20年を経て、当時、約30%といわれたコーヒー生産高の世界シェアはその後35～40%で今日まで推移している。BRICS最盛期の2005/2006年には40%を超えるデータもあり、中間層の拡大が同伴したため国内消費も堅調という。広大な国土を有するブラジルでは今後も地域の特性に合う商品戦略が鍵だと現地のコーヒー事業者は語る。2020/02/18付【サンパウロ時

事】によるとブラジルの焙煎会社が日本企業の焙煎部門を2億1000万レアル(約53億3000万円)で買い受けたと報じている。ブラジルの勢いはまさに驚異的だ。

品種品質、種類をたのしむ

カフェジニョという見エスプレッソ風のコーヒーがブラジルにある。文字通り(cafezinho=小さなカフェ)は小さなカップで提供される。焙煎度の深い豆で抽出した濃い色の少量のコーヒーに砂糖をたっぷり入れて飲むことで知られる。

さてそこで、コーヒー鑑定士の授業に触れよう。実習① サンプル豆の等級(品質タイプ)決定するハンドピッキングという手作業があり、サンプル100gの生豆から混入物及び異質な豆(欠点豆)を取り除く。欠点豆には欠点を示す一覧表があり100g中の欠点豆の点数の合計で等級(No.2～8)が決まる。輸出に適さない豆は国内マーケットで消費される。今は必ずしもそうではないが、それらの豆は主に焙煎専門店で深く煎られており安価で買うことができた。なるほどカフェジニョは理に叶っている。疲れているとき、甘味が欲しいとき、時間にゆとりがないときなど、仕事の合間にもぐいひと飲み、次の行動に移るのもいいではないか。深い焙煎度が豆の欠点を隠してくれる。安価な魅力に加えて量的にも胃に負担がかからない。欠点を生かしたうってつけの飲み物だ。

また、カフェジニョに愛着を持つ一方で、質にもこだわる人々に応えて上質の豆が店頭にラインナップされている。香りを味わう贅沢、味わう人と繋がる喜び、豊かな空間をも演出する好個な豆の需要は伸びつつあり、スーパーや量販店の試飲コーナーなどもうまく機能していると聞く。さらに、スペシャルティコー

ヒーなる豆がアメリカで問われて数十年、その歴史はまだ浅いがブラジルでもスペシャルティコーヒー協会(SCAB)が1991年に発足している。これについては後述する。

ブラジルで栽培されている主な豆の品種を挙げよう。ムンド・ノーボ、カツアイ、カツーラ、ブルボン、マラゴジッペなど、他にも交配種の研究が進んでいる。なかでマラゴジッペは大粒で形状の美しい豆だ。サイズを表すコーヒー用語でスクリーン19～20と表示される。ところが風貌に似合わず大粒のせいか大雑把な味がする。何事もほどほどが良いということか一般にはあまり見かけない。そこで実習② 豆のサイズ(13～20)は篩(ふるい)を使って決定づける。金網が張られた角形の篩を段々に重ね持って篩(ふる)っていくという古風な方法で行う。そして実習③ 品質を格付けするカップテストではまず焙煎済みの豆を粉砕しカップに入れ湯を注ぐ。その上澄みを匙で掬って口に含み風味、香味、後味などを評価する。同時に薬品臭、カビ臭、刺激臭などの有無を見極める繊細な味覚のセンスと集中力が要求される。以上で述べた①～③が主な実習だ。

さて、スペシャルティコーヒーとは、産地の気象や土壌を生かし自然を尊重した環境下の小規模な区画で栽培される特別の豆をいう。加えてトレーサビリティ(農園名や品種、栽培方法、流通経路)が明確に表示され農園独自のブランド名を持つ。1999年にブラジルコーヒーの品評会「ベスト・オブ・ブラジル」の開催後、特に注目を浴びたスペシャルティコーヒーは「カップ・オブ・エクセレンス」の



カップテスト▶
(筆者撮影)



◀左)「オール・アバウト・コーヒー」
右)「História Viva Temas Brasileiros — No.1 UM PAÍS CHAMADO CAFÉ」

称号を加點制で競う品評会を各国に呼び起こした。消費国でもその称賛度は高く日本でも2003年に協会(SCAJ)が発足している。ちなみに加點制で行われるこの品評会の審査基準は、輸出を目的とする前述のブラジル方式とは異なるものだ。

もう一つ体験したことだが、2014年に筆者が旅したアマゾンの牧場で飲んだコーヒーの味は格別だった。発電棟が電力を供給するアマゾン奥地、地域を問わず人々のコーヒーに対する意識は確実に高まっている。

コーヒーの物語性

「ジャクーコーヒー」。聞きなれないコーヒーがブラジルにある。ジャクーという鳥(ホウカンチョウ科・キジ目に属す)が啄んだコーヒーの実の種を糞から取り出して精製する珍品で腸内発酵によるあっさりした味らしい。類似したコーヒーは他国でも存在する。2005年にインドネシアの友人から届いた航空便ではコピルアク豆のノスタルジックな香りがダイレクトに手渡された。ほかでは猿や象に由来したコーヒーも聞くところだが近年では発酵に拘った嫌気性発酵によるコーヒーも話題にあたりし。

今昔とコーヒー物語を紡いでゆけばその昔、鉄鍋や土鍋でコーヒー豆を炒った時代があった。当時を偲ぶ陶器製の片手焙煎器具が日本でも売られていて50g程度の生豆なら簡単に炒ることができる。興味を誘うのでブラジル豆を炒ってみよう。火にかけて数分、色合い(浅い色)を確かめ、弾ける音“ばちばち”を聴き、匂い“香ばしさ”を嗅ぎ分けながら絶妙なタイミングで火から離す。ばちばち音が次第におさまって塩梅よい炒り豆ができる。という手順だ。仕上げを余熱に預けるまでの技が試されて50gの生豆は2割ほど量を減らして炒り終えた。水分が飛ぶので減量は通常の範囲。少々炒りムラもまた手焙煎の醍醐味だ。これで3～4杯分のコーヒーが楽しめる。さて

話を戻そう、土鍋などで炒った豆は臼で挽きながら徐々に粉にするという。手間暇をかけて熟成されてゆくその名もゆかしい臼引きコーヒー(café do pilão)は想像するだけで味わい深い。惜しめない旨味を引きだすというcafé do pilãoのpilãoは臼を意味する。アマゾンで飲んだコーヒーの赤い袋の表記pilão(ピロン)が印象的だ。

カフェの旅

ところでコーヒーの起源は9世紀にまで遡る。周知の通りエチオピア説およびアラビア説があり、ブラジルには1727年にフランス領ギアナからパラ州に種と苗が持ち込まれた。さらに『オール・アバウト・コーヒー』によるとパラ州からの最初の見本の送り出しが1732年とある。収穫までに要する年月を鑑みればこの時期の栽培の成功が顕著だ。また『História Viva Temas Brasileiros — No. 1 UM PAÍS CHAMADO CAFÉ』に掲載の伝播を示した絵図「A viagem do café」でもわかるようにカフェの旅はまさに1727年フランス領ギアナを起点としている。

ブラジルにおけるコーヒー栽培は19世紀に入ると広がっていくが、本格化するのは1888年の奴隷制廃止以降である。主産地サンパウロ州のコーヒー樹の植付数は、1890年2億本、1905年6億本、1930年10億本と急増し、20世紀初頭、サンパウロは世界のコーヒー供給量の半分を輸出していた。1908年に始まった日本人移民による入植、開墾の苦難の歴史がサンパウロのコーヒー栽培の拡大・発展に深く関係していることは言うまでもないが、日系移民による農業面での多大なる貢献は改めて再認識したい。

コーヒーの映像効果

本題から逸れるがコーヒーに特化した作品に限らず世界中の映画作品にはコーヒーが度々登場する。飲む、淹れる、カップを傾ぐほか、主題には何ら繋がりをもたないコーヒーがさしだされて物語が進



上) 国別生産グラフ
下) カフェの旅(伝播を記した絵図)
História Viva Temas Brasileiros — No.1 UM PAÍS CHAMADO CAFÉ

て視覚にやさしいコーヒーの映像効果は大きい。

一例をあげれば、名優トニー・ハモスとグロリア・ピレスが好演したブラジル映画「Se Eu Fosse Você」邦訳「逆転夫婦」(2006)は物語的一幕にコーヒーが登場するコメディタッチな大ヒット作品だ。2006年の観客動員数365万人、2009年地上波TV(グローボ局)で上映された時の視聴率32%、とまさにメガヒットした。このBGMならぬバックグラウンド・コーヒー効果は絶大であった。

コーヒーの百科全書的魅力

世界的なコーヒーブームが続いている。コーヒーに関する優れた書も多く上梓され、多種多様な楽しみ方や多様性が雑学さながらに語られる。他方、難解ながら研究者の専門書は奥が深い。それらの書を通じて得る貴重な情報、知識に触れつつ本稿では筆者なりの視点でブラジルコーヒーに論及した。その奥深い魅力を語るのには容易ではないけれどあらゆる方向からの問いに平然と対応できる飲み物、主役であり脇役でもあるブラジルコーヒーを書に例えるなら、私は全幅の信頼をよせて「専門書」と言いたい。そして「雑学事典」と言うだろう。宗教の根源まで見つめるような物語性を秘め懸命に咲くコーヒーの花、瞬間のスピリットで開花する蕾もまたその奥深さを語るようだ。



●特集● ブラジルコーヒーの魅力再発見

「世界一」へのイノベーション



江坂喜達
(イグアス・コーヒー 経営審議会副議長)

ブラジルコーヒーの歴史

16 世紀に中米のフランス領ギアナより、北部パラ州のベレン市に植樹されたのがブラジルにおけるコーヒー生産の始まりである。アマゾン地帯における生産は成功しなかったが、後にリオデジャネイロ州に持ち込まれ、更にミナスジェライス州やサンパウロ州等を含むブラジル中南部にその生産が広がり、19 世紀後半においては、コーヒーの生産国として世界一の座を獲得した。ブラジルの輸出品目トップとなったコーヒーは、国家経済の重要な役割を担ったことは言うまでもないが、近代資本主義を定着させただけではなく、生産労働が奴隷から海外からの移民による賃金労働へシフトされる中、社会・文化や政治などへ大きな影響を与えることになり、中南部における工業化や都市化をも促進させた。日本からのブラジルへの移民の歴史についても、このブラジルにおけるコーヒーの歴史と重なり合う。

ブラジルのコーヒー生産地

コーヒーの輸出拡大において伸びたブラジルの消費は輸入品に依存していたが、1929 年の株価大暴落において引き起こされた世界恐慌の中、1930 年代においてコーヒー価格も下落し、輸入産業に大きな影を落としたことから、サンパウロ州を中心としたブラジルの工業化を促進させることになり、1929 年から 1937 年の期間においてブラジルにおける工業生産は 50%の成長を記録した。

コーヒーがブラジル経済に与える勢いが続く中、1930 年代には、サンパウロ州とパラナ州北部を繋ぐ鉄道事業が進められたことにより、コーヒーの生産もこの地域へと移り進み、パラナ州においては、1960 年台には、アラビカ種を中心に世界の約 28%を生産するところまで成長した。しかしながら、1975 年には雪を伴っ

た零下 10 度の寒波のためコーヒーの木は葉や枝ばかりでなく幹や根にまで被害を被り、この霜害は、パラナ州のコーヒーを全滅させたことから、生産地を徐々に北上させることになる。アラビカ種においては、1990 年代にセラード生産者協会が「セラードのコーヒー」といったブランドにおいて、標高や天候などのコーヒーの栽培に適している自然環境を活かした高品質栽培プロジェクトを立ち上げ、今ではブラジルにおける総生産の 20%のシェアを占めている。差別化や付加価値を目的として、セラードの他にもスール・デ・ミナスやモジアナなどの産地ブランドを確立する動きも出てきている。また、ロブスタ種の一つであるコニロン種は、1970 年代にはエスピリトサント州、また 1960 年代に始まり、2010 年代において飛躍したアマゾン地域南部に位置する Rondônia 州などにおいて生産を大きく伸ばしてきている。

世界のコーヒーの生産と消費

コーヒーは、ブラジルやコロンビア等の中南米、ベトナムやインドネシア等の東南アジア、エチオピアやウガンダ等のアフリカなどの約 56 カ国において、約 12 百万世帯もの農家により生産されており、それが世界で毎日約 30 億カップの消費に繋がっている。消費、生産共に成長を見せるコーヒー。直近の 2019 年／20 年クロップにおける世界でのコーヒー生産数量は約 1.7 億袋（1 袋＝60 キロ）で、ブラジルはその 37%に当たる 63 千万袋を生産する世界最大の生産国。そのブラジルにおいては、アラビカ種とロブスタ種の一つであるコニロン種の 2 つの種類のコーヒーを 6 地域において生産していることから、天候や標高等による育成環境の違いにより、バラエティー豊かな様々な味や香りのコーヒーを世界に提供している。

コーヒー栽培におけるイノベーション

そのコーヒーの生産では世界トップランナーであるブラジルにおいても、国際競争力維持の観点から、生産効率の向上を目的としたイノベーションが必須となり、その栽培、収穫や精製は、伝統的な手法から大きく変わってきている。

ブラジルにおけるコーヒーの収穫については、白い服を着た者が手作業により行っているイメージを持っている方々も多くいると思うが、ミナスジェライス州の一部の高地傾斜地域を除き、大規模農園を中心に、今では機械摘みによる収穫がメインになりつつある。機械摘みでは、機械内部のプラスチック製の棒を振動させることにより、果実を落とし収穫する方法で、初期投資は必要で、比較的平面な農園での使用となるが、1 台で 100 人分の仕事をこなせる。また GPS における無人操作も可能となることから、効率が向上することが特徴。機械摘みにおいて、過去には熟度を選んで収穫することは困難であったが、技術の進化により、比較的早く熟成する上部のみの振動により、熟成豆を効率よく収穫するタイプの機械も出てきており、品質管理面においても進化してきている。また、北部におけるロブスタ種を中心に、品種改良や灌漑システムにおいて、年々 2 桁台の増加を記録しており、コーヒーの木の開花や収穫の時期の風景が大きく変わって来ている。

ブラジル農務省直轄の CONAB（ブラジル食糧供給公社）発表データでは、アラビカ種で 1ha 当りの平均が約 30 袋（1 袋当り 60 キログラム）、コニロン種では平均約 40 袋となっているが、上述の通り、栽培地での生産の効率向上の実現により、



生産効率の高い Rondônia 州のコニロン種コーヒーの木▶



◀沢山の真っ白な花や真っ赤な実で一変する風景

コニロン種を中心に同じ 1ha において 180 袋から 210 袋もの生産に成功しているところもある。その生産効率は 5 倍を超え、ブラジルにおけるコニロン種の生産面積が 2 桁台で減少する中、生産量が年率 3%から 5%程度の速度で増加していることの裏付けとなる。

コーヒーの木の栽培

コーヒーの種子は 50 日から 60 日間で発芽し、約 8 ヶ月から 1 年の間、苗床で育てられた後に農園に植え替えられ、2 年から 3 年程度で収穫出来る状態となる。真っ白な花の開花（アラビカ種は、9 月から 10 月）後、青い実となり、それが適度な降雨と晴天が望ましい成熟期（同じく、1 月から 4 月）を経て真っ赤な実となり収穫される（同じく、5 月から 8 月）。その真っ赤な実を、ブラジルではセレージャ（ポルトガル語でサクランボ）と呼ぶ。そのコーヒーの実から、コーヒー豆となる種子を取り出すことを精選といい、非水洗式のナチュラル精選や水洗するウォッシュド方式などにより、様々な風味を有するコーヒー生豆が完成する。

ブラジルにおけるアラビカ種の平均生産量から算出すると、1 本当り約 3.6 キログラムのコーヒー果実が収穫される。これを精選にかけると約 540 グラムのコーヒー生豆となり、更に焙煎・粉砕すると約 430 グラムのコーヒー粉となる。コーヒー 1 杯を淹れる為には、約 7 グラムから 10 グラム程度のコーヒー粉が必要となることから、この 1 本のコーヒーの木からは約 40 杯から 60 杯のコーヒーが出来るということになり、我々が毎日一杯のコーヒーを楽しむ為には、毎年 6 本から 9 本のコーヒーの木による生産が必要となる。

ブラジルにおけるインスタントコーヒー事業

20 世紀に入ってからコーヒー生産が徐々に供給過多となって来たことを背景に、ブラジル政府は、その対策に乗り出す。目をつけたのは当時、アメリカを中心に研究されていたインスタントコーヒーの製造であった。その狙いは、コーヒーに付加価値を付けてコーヒーの輸出の拡大を図ることであり、国内におけるインスタントコーヒー製造・販売事業の促進政策を打ち出した。その政策に応え、コーヒー農園主を中心に 72 件の事業立ち上げの申請が提出されたが、その認可を得られたのは、5 社のみであった。その内の 1 社がイグアス・コーヒー社。当時のコーヒー最大生産地のパラナ州北部に位置するコルネリオ・プロコピオ市のコーヒー大農園オーナーら 79 名により 1967 年に設立され、サンパウロ証券取引所に上場した。許認可の取得、土地の選定や、フリーズ・ドライといった当時の最先端技術を用いた乾燥設備の輸入と工場の建設などには様々な苦労があったが、1971 年には無事、開所式と販売第 1 号となる米国への輸出が実現した。

丸紅の事業への参画

当時の日本におけるコーヒーブームとも言える生豆輸入の大幅な伸びを背景に、丸紅は、既に行っていたブラジルにおいてのブラジル産コーヒー生豆の貿易以外にコーヒー事業への参入の機会を模索していたが、イグアス・コーヒー社の海外への輸出販売の拡大や生産技術の革新への協力要請を受け、1972 年に同社への参画を決定した。

スタートしたばかりのイグアス・コーヒー社の一つの悩みは生産コストが高いことであったことから、まずは、食品分野における日本の技術を導入する為に、本邦からの技術者の派遣を実施、また総合商社の海外ネットワークを通じて、商品販

売の世界展開を図る等の試行錯誤の経営が続いた。その後も、工場で発生した火災や過去に例がない霜害により近隣エリアのコーヒー農園が全滅するなどの問題に見舞われた。

しかし、「5S 活動」等による生産工程の改善や効率の向上、品質管理の徹底、海外市場・顧客の開拓などにより、このような困難を乗り越え、設立から 50 年以上が経過したイグアス社は、現在年間 22 千トンのインスタントコーヒーを生産し、世界 50 カ国以上へ輸出する業界トップレベルのインスタントコーヒー製造販売企業に成長している。

丸紅は、ブラジルにおいて、引き続きイグアス・コーヒー社のフリーズ・ドライ乾燥設備の更新による製造能力の増強を図る一方、ブラジルで蓄積してきたインスタントコーヒー製造販売事業の生産技術、及び販売ネットワークをフルに活用し、ブラジルに次ぐコーヒー生豆生産地で、インスタントコーヒーの主原料として用いられるロブスタ種においては世界最大の生産国であるベトナムにおいて、新たなインスタントコーヒー事業の取り組みをスタートさせた。



▲コルネリオ・プロコピオ市に位置するイグアス・コーヒー社の工場

品質にこだわる カフェ・ボンフィーノ

カフェ・ボンフィーノは、ファスナーと建材で知られる YKK グループのブラジル現地法人が経営する農場で生産されたコーヒー豆の名称で、農場の所在地の地名に由来して名付けられた。この農場から出荷されるコーヒー豆は、主にブラジル国内で消費されているが、一部最高級品を日本に輸出している。これがカフェ・ボンフィーノだ。

なぜ、YKK がコーヒーを？ とよく聞かれるが、YKK グループは 1972 年よりファスナー事業でブラジルに進出し順調に事業規模を拡大していた折、セラード高原の開発に力を入れていたブラジル政府から投資の打診を受けたことがきっかけであったと聞く。勿論 YKK グループでは初めての農業分野への挑戦であった。

1985 年に現地法人の設立と同時に日本から赴任した派遣員は、農学部出身であったものの、灌木しか生えていない痩せたこの土地で無謀にもコーヒー栽培を始めたが思うようにいかない。藁にも縋る気持ちで当時最も権威あるサンパウロ大学のコーヒー学博士の門を叩き最先端の技術の教えを請いながら試行錯誤を繰り返した。

酸性土壌の痩せた土地はコーヒーの栽培には適していなかったが、牛や豚の飼育などによる地道な堆肥作業で有機土壌への改良も行いながら最高級コーヒーに向かって栽培が始まった。最初の 4 年間で植え付けられたコーヒーの苗木の植樹数は 100 万本に達し、東京から広島までコーヒー樹と並木を作ったと例えられている。

YKK 農場とは

首都ブラジリアから南東へ約 300km の、ミナス・ジェライス州ボンフィノポリス市（標高約 900m）に所在する YKK 農場は、1985 年に開場したが、面積は 3,300 万坪（山手線エリアの約 1.6 倍）、うちコーヒー園約 70 万坪（東京ドーム 40 倍分）

であり、主な事業は放牧、酪農、養豚、コーヒー栽培で、従業員数は約 50 名（直接雇用）となっている。コーヒー栽培については、育苗から収穫、精選、乾燥、検査（手作業）、袋詰め、輸出まで、機械化を進めながら一貫生産体制をとる。また、灌漑施設も整えるため干ばつの影響を受けにくく、毎年安定した品質と収穫量を維持している。現在コーヒー生豆の収穫量は約 600 トン／年（内約 20 トンを日本に輸出）で、日本に輸出する生豆は、ロットごとに手作業での全数検査を施し、その作業でビーベリィー豆（丸豆）も分別されている。養豚については、農場で飼育する豚（約 4,000 頭）には農場で栽培したトウモロコシを飼料として与え、そこで採取する肥とコーヒーチェリーの皮を混ぜてつくる自家製有機肥料を活用する。また、隣接するコーヒー農園がなく、病害虫の飛来・伝染病なども少ないため、化学肥料や農薬の使用機会も少なく抑えられている。

カフェ・ボンフィーノ（コーヒー）

コーヒーの品種はアラビカ種カトゥアイを栽培、低木性のこの品種の採用により、JACTO（ブラジル製）社の大型収穫機を使用し、大面積でも最適な時期に収穫できるようになった。レッドとイエローカトゥアイの 2 種類を栽培するが、特にイエローカトゥアイは、日本国内市場での流通量が少ない希少価値のあるコーヒーといえる。

精選方法はブラジルでは珍しいウオッシュド（水洗式）を採用、果実を取り出すまでに 2 段階の選別と発酵作業を通じてクリーンでバランスのよい香味が実現できている。

品質評価については、両種とも毎年 SCAA（全米スペシャルティコーヒー協会）に鑑定を依頼し、カップングテストの結果では 2013 年より 6 年連続でスペシャルティコーヒーの認定基準となる総合評価 80 点を上回っている。とりわけ、甘味（Sweetness）、

透明性（Clean cup）、統一性（Uniformity）は満点の評価を毎年いただいている。

（株）カフェ・ボンフィーノ

ブラジル現地法人からコーヒー生豆を直接輸入し日本国内での販売を担う。「一本の苗木から一杯のコーヒーまで」一貫通貫でこだわり、2015 年より自家焙煎施設 2 か所と直営カフェ 3 店舗を運営する。

品質へのこだわりから、SCAA（全米スペシャルティコーヒー協会）の鑑定機関で鑑定後、大粒なロットからハンドピックで厳選された豆だけを出荷、海上輸送の際はリーファコンテナ（空調コンテナ）を使用し、日本で保管する際も鮮度にこだわり空調倉庫を使用している。

国内 2 か所（東京都内と富山県内）に自家焙煎所を設け、できるだけ新鮮な豆の供給に心がける。また、直営カフェにおいては注文が入ってからコーヒーを挽き、ハンドドリップで淹れることで、カフェ・ボンフィーノの魅力を最大限に引き出せるようにこだわる。

私達の目標は、より良いものを、より良い方法でリーズナブルに提供していくことで、より多くの消費者に喜んでいただくことであり、その結果として農場からの輸入増に繋がりと、農場の繁栄ひいては地域貢献にも繋がっている。

2017 年ボンフィノポリス市庁舎を訪問した際、市長より「このコーヒーは我々の誇りでもあり、世界中に広まることを期待している。」という温かい激励を得た。地域貢献に繋がっていることを改めて認識したうれしい瞬間であった。これからもカフェ・ボンフィーノを美味しく楽しんで頂けるよう「善の巡環」の心で育てていきたい。

“Vamos tomar o Café Bonfino !”



青木正登
（株）カフェ・ボンフィーノ代表取締役



ゲノム免疫生物学とは 私の研究テーマについて



アンセルモ鎌田
（理化学研究所
生命医科学研究センター 博士研究員）

ヒトゲノムプロジェクト

2003 年に完結したヒトゲノムプロジェクトは、遺伝物質（ゲノムと呼ばれる）の基本情報にアクセスすることで、人間の本質に関する知識のランドマークを表現した。それを通して、私たちの体の機能の多くを維持するタンパク質など、人体の主要な構成要素に関する本質的な詳細を明らかにすることが可能であった。しかし、このプロジェクトの最も興味深い側面の 1 つは、私たちの DNA の多くが、私たちの祖先の生殖ライン（例えば精子または卵母細胞）にウイルスゲノムを埋め込むことによって化石化した何千ものウイルス起源の部分によって構成され、そしてそれが世代を通して永続化されたという発見だった。

ヒトゲノムの約 8% が部分的または完全なウイルスゲノム配列によって占められており、内在性ウイルス様配列 (EVE) と呼ばれている。それ以来、古ウイルス学として知られている研究領域は、EVE の役割を調査し、最初我々の機能にとって本質的と考えられていたタンパク質のコード領域との比較においてウイルス配列のために 8 倍のスペースが確保されている理由を理解しようとしてきた。

ウイルスキメラ

いくつかの感染症がウイルスによって引き起こされていることを考えると、私たちの多くの部分はウイルスキメラであるという原則は、ロバート・ステューブソン著の『ジキル博士とハイド氏』という古典的小説作品を思い出させる。この作品は、人々の空想の中に二重人格に苦しむ主人公の戦いと彼が異なる人格を状況に応じて表出させたこと一すなわち、ハイド氏として現れる望ましくない、解放された分身によって指揮される人格、これとは対照的なジキル博士のより慈悲深く、高潔な人格一をしっかりと刻み付けた。この意味で、古ウイルス学は、健康的な生活の維持と病気への関与における機能を強調することによって、EVE の二重性を明らかにするのに役立つ可能性がある。

EVE が当初ウイルスの化石と考えられていたのは、それがレプリカントウイルスを産生しなかったという事実と、ほとんどの通常の生理的状態では非アクティブなま

まであったためだ。しかし、最近のマウス及びヒトモデルの多くの研究では、EVE は胚発生中や老化過程において活性である。加えて、EVE は、神経変性症（多発性硬化症及び筋萎縮性側索硬化症など）、自己免疫症（全身性エリテマトーデスなど）の様々な疾患および腫瘍に多く存在することが観察されている。これらの疾病との関連が強調されているが、それらが様々な疾患の原因または結果として作用するかどうかは、まだ解明される必要がある。

内在性レトロウイルス W

特にヒトゲノムには、内在性レトロウイルス W (HERV-W) と呼ばれる特有の EVE ファミリーが存在し、数百の構成部分の中にシンシチンと呼ばれる胎盤の形成に必須のタンパク質の 1 つが含まれている。驚くべきことに、HERV-W の祖先のシンシチンの初期機能は、宿主の免疫反応を逃れるために標的細胞を感染を避け凝集させることであった。これまで規定したこと及び哺乳類のゲノム中のシンシチニンは、胎盤を有する種の出現に不可欠であった。そしてこの種は、胚の植え込みに不可欠な構造を作るため自己の利益のための凝集機能を再構築することができた。

日本での研究生活

1 年ほど前、私は何千人ものブラジル人同胞と同様に日本における生活を始めた。ブラジルでは特にヒト免疫不全ウイルス (HIV-1)、ヒト T リンパ好性ウイルス (HTLV-1) などのレトロウイルスの研究を行った経験があるが、現在は、理化学研究所 横浜キャンパス 生命医科学研究センターのゲノム免疫生物学理研白眉研究チームのサポートを得て、神経疾患の発症における EVE の関与をリサーチすることに挑戦中である。このテーマは、私には新たな創造的チャレンジであり、全く未踏の環境で新しい経験を深耕することが出来、さらには研究のためのアイデアのインスピレーションの源としても役に立っている。

（編集部註：原文はポルトガル語、編集部訳。アンセルモ鎌田さんは、ペルナンブコ連邦大学免疫学博士、昨年より理化学研究所にてポストドク研究員として研究活動に忙しい日々を過ごしている。）

二極化対立の背景



深沢正雪
(ニッケイ新聞編集長)

ここ数年、ブラジル政局は右翼と左翼に二極化していると言われる。「ボルソナロ大統領 VS ルーラ元大統領」などの図式だ。その社会的亀裂の底辺には、国民の信仰心の変化がある。むしろ、それが表面化したものが二極対立だと感じる。

それは、世界最大のカトリック人口を誇ったブラジルで起きている、プロテスタント福音派激増という現実だ。キリスト教内における信者の流動現象だ。

百年前には国民99%がカトリック信者、1940年でも95%、1991年には83%、2000年には74%になっていた。その分、福音派が増えている訳だ。

フォーリャ紙1月14日付によれば、ブラジル地理統計院(IBGE)の2019年調査では、「2022年にカトリック信者は人口の半分を割る」と予測されている。その10年後の2032年には39.6%まで減り、逆に福音派はその時には39.8%と上回っている。

その分、カトリック的な発想が国民の常識ではなくなり、福音派的な判断が基準になっていく変化が起きている。

この福音派は、米国では国民の4人に1人といわれる最大宗教勢力だ。トランプ大統領の一大支持勢力でもある。ブラジルは米国化しつつあるのかもしれない。

戦前のブラジルはフランスやイタリアなどの欧州ラテン諸国のカトリック文化の強い影響を受けていたが、戦後は米国の影響下に入り、プロテスタントが増えてきた。

では何が「カトリック的」か、といえば、社会的弱者の擁護に熱心、移民受入れ賛成、環境保護重視、多民族・多文化支持、寛容的な思想などだ。

「福音派的」は、妊娠中絶に絶対反対、環境保護軽視、イスラエル擁護、移民受入れ反対、保守的で原理主義的な思想傾向、強い勤労思想などだと言われる。

カトリック教会は軍政時代、学生運動や組合運動を影で擁護した。その流れから労働者党(PT)創立を支持し、ルーラに代表される左派勢力と相性が良かった。米国でいえば民主党的な方向性だ。

ただし、パチカンでもたびたび問題になる汚職などの暗い影も持つ。それに対し、ボルソナロ本人はカトリックで、元軍人、国粋的な思想の持ち主だが、妻がプロテスタントのパチスタ教会の熱心な信者、息子フラビオもパチスタ教会、同エドアルドもプロテスタントだ。

どれだけ連邦議会の中で福音派が力を持っているかといえば、議員数で一目瞭然だ。

18年8月12日付エスタード紙によれば、Frente Parlamentar Evangélica (FPE、福音派議員の院内会派)には182人も所属する。全513人だから35%を占める。同会派のうち、最大派閥

はAssembleias de Deus (アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団、国内信者数1231万人)のカリスマ牧師らを連邦議員に当選させたbancada evangélica (福音派議員団)で、なんと82人もいる。下手な党より結束が固いと評判だ。最大党PTが53人だから、それより影響力が強い。これがボルソナロの議会基盤の一つだ。

同教団は、米国ミズーリ州に本部を持つ、ペンテコステ派世界最大の一派だ。1901年に米国で創立され、1910年にはブラジルで布教を開始した。

地域ごとのカトリック比率も興味深い。PTの選挙地盤と言われる北東伯は、軒並みカトリック率が高い。2014年調査でピアウイ州89%、セアラ州81%、パライバ州80%など。そしてボルソナロ人気が高いリオ州は50%、サンパウロ州は66%と低い。その分、福音派が増えている計算だ。

今年2月11日、ルーラ元大統領がラヴァ・ジャット裁判出廷を延期して、法王に会うためにローマへ行った。一方、昨年9月7日、ブラジル独立記念日パレードの大統領観覧席にはIgreja Universal do Reino de Deus (ユニベルサル教会、国内信者数180万人)の創立者エジル・マセドが座っていた。RecordTV局のオーナーだ。

福音派増加はテレビメディアにも反映する。早朝にカトリック・ミサを放送する最大のGloboTV局に対し、RecordTV局はゴールデンタイムに教団の礼拝を堂々と中継する。そしてグローボ批判を繰り返して噛みつき、GloboTV局の寡占状態を崩し、視聴率を上げてきた。GloboTV局嫌いで有名なボルソナロは、RecordTV局、SBT局、Rede TV局、Band局を味方につけて選挙戦で勝った。

フォーリャ紙2015年6月30日付サイト記事によれば、GloboグループはPT政権時代(2003~2014年)の12年間に62億レアル、この期間の連邦政府広告費の45%をえていたという。

ところが2018年5月2日付カルタ・カピタル誌サイト記事によれば、Globoグループは2017年に初めて赤字8300万レアルを記録。ボルソナロは就任以来、GloboTV局への連邦政府広告を減らしているという。

このようにカトリックから福音派へという流れはいろいろな場面に影響が現れる。今は拮抗する状態だから、対立が深まり分裂する。だが、いつか決着がつけば、どこかで落ち着くのかもしれない。



コマツのブラジルにおける取り組みを振り返って



岡田俊郎
(コマツ ブラジル総代表)

ブラジルにおけるコマツの活動は、1960年代初頭にブルドーザー208台を受注・輸入したことに始まり、1970年代前半、日本からの建機の輸入を通じてブラジルの発展に貢献した時代を経て、1975年に現地生産を開始、1998年に販売会社設立、2013年のマイニング代理店直営化を経て、今日に至っている。

1960~1970年代前半

1967年にサンパウロ事務所を開設、商社経由の輸入と並行して代理店の選定を進め、1970年頃に代理店網の構築を終えた。この間、「ブラジルの奇跡」と呼ばれた1970年代前半の資源・インフラ開発ブームに対応して、大手コンストラクタやアマゾン第二工兵軍団にブルドーザーを販売した。工兵軍団への納入に際しては顧客の要望を受けて漂流物などのリスクが伴うアマゾン川を河口から貨物船を遡上させて搬送するといった積極果敢な取り組みにも挑んだ。

1975年の現地生産開始から1990年代まで

一方でブラジル政府が1969年に建機の国産化政策を打ち出し、1970年代に入ってからブラジルに工場を持たない会社の建機輸入を順次禁止始めたことから、コマツはブラジル現地資本と提携することによって国産化の権利を確保、1973年1月に現地生産の準備を始め、1975年4月にブラジル国産1号機のブルドーザーが完成した。

当初、国産ブルドーザーは、現地生産によるコストアップにも関わらず、政府の国産品購買向け低利融資が効果を発揮して、最も大きなサイズの製品への引き合いが多かった。しかし、2年後にブラジル国内はインフレが再燃、政府も融資を引き締めざるを得なくなったことから需要は不振に陥った。その後も、ブラジル経済が繰り返す数年ごとの景気変動に経営は翻弄されたことから、1988年からはブラジル国外の市場への輸出も行うグローバルな生産拠点としての役割を担うことになり、当初の北米に加え、南米や中東向けに輸出対象地域を拡大した。1990年代後半には、中型ブルドーザーのグローバル生産拠点としての位置付けが固まる一方で、油圧ショベル、ホイールローダー及びモータグレーダーの生産も緒に就き、現在の生産体制の原型が整った。

1998年の販売会社設立から2010年代初頭まで

このように生産体制が拡充する一方で、土木・建設分野に加えマイニング分野の需要も成長が見込まれるようになった

ことから、マーケティングやアフター・マーケットの機能を向上するため、1998年に販売会社を設立して代理店網の強化をはかった。2002年に労働党がブラジルの政権を取って以降2010年代初頭までの間は、世界的資源ブームやブラジル政府によるプロジェクト投資や政策金融で、リーマンショックによる一時の落ち込みはあったものの、土木・建設、マイニング分野ともに成長が続いた。

2013年のマイニング代理店直営化以降

マイニング分野の成長が続く中、Valeなどの顧客からは機械の稼働を止めないためのサービスに対するニーズが高まった。そこで、2013年にマイニング代理店を買収・直営化し、キメ細かな顧客対応が可能な体制を整えた。これにより対主要顧客のマーケットシェアの向上に成功するとともに、豪州、チリなどで導入実績のある無人ダンプトラック運行システム(AHS)をブラジルでも初めて導入し、「AHSトレーニングセンタ」を新設するなど、マイニング分野の持続的成長に貢献する体制を確立した。

土木・建設分野では、引き続き代理店方式を採用しているが、顧客ニーズに対するキメ細かな対応の必要性は高まってきたおり、コマツ自身が広域の大手顧客を対象に直販営業を掛けるキアアカウント・グループの活動を立ち上げるとともに、代理店網の整備・再編に乗り出している。また、生産体制についても、設備の更新・再整備が始まっている。

2020年に入り、ブラジル経済は、2014年以降の大不況からの景気回復が徐々に本格化しようとしている。この機会を逃すことなく、また、中長期的に持続可能な成長の礎を築くためにも、さらなる取り組みの強化に努めたい。



▲ AHS チームのメンバー
AHS : Autonomous Haulage System

新型コロナウイルス感染症への法的対応



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所日本弁護士
現在ブラジルで勤務)

1. 新型コロナウイルス感染症の拡大

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) がブラジルでも拡大している。それにより事業活動にも様々な影響を与えており、企業は、取引先との関係、労務関係、行政・司法手続きの管理等、多くの事項への対応に迫られている。そこで、本稿では、新型コロナウイルス感染症拡大により生じ得る代表的な法的問題点について解説する。なお、新型コロナウイルス感染症対策として、法令の制定や改正などが日々行われているため、下記で記載する事項について、本稿執筆時点 (2020 年 3 月下旬) 以降に変更されている可能性があること、また、下記事項以外にも多くの特別措置が存在することにご留意いただきたい。

2. 契約上の義務の不履行

新型コロナウイルス感染症の影響により納入遅延等の契約上の義務違反が生じている。契約上の義務違反は通常損害賠償義務を生じさせるが、感染症という誰もが予見していなかった事態に基づき生じた契約違反であるため、いわゆる「不可抗力」として免責される可能性がある。この点、ブラジル民法 393 条において、「不可抗力による債務不履行は免責される」旨規定され、また、契約においても、不可抗力の場合は免責される旨の規定があることが多い。ブラジル民法においては、「不可抗力」は、当該結果が回避不可能な事象と定義されている。過去の判例では、同様の事例 (インフルエンザの流行) において不可抗力を認定しているものもあるが、どのような場合に不可抗力として免責されるかは個別事案ごとの検討が必要となる。たとえば、新型コロナウイルス感染症の影響で通常のルートで資材を調達できなかったとしても、代替品を同じような価格で調達できるのであれば不可抗力として認定されない可能性はある。

3. 労働法

商業活動の禁止命令、需要の減少、外出自粛要請などにより、多くの企業がコスト削減、在宅勤務などの特別な対応を迫られている。そのような事態を念頭に、労働法を改正する暫定措置 927 号 (Medida Provisória No. 927/2020) が制定された。表は、同暫定措置の主な点である。

表記載の事項のほか健康診断の一部免除、祝日の事前利用、労働協約の効力の延長、FGTS の支払い期限の延長などが規定されている。

また、暫定措置 927 号で一旦制定されその後削除された雇用契約の停止については、別の暫定措置 (Medida Provisória No. 936/2020) で規定された。同暫定措置により、雇用主は、①労働時間の削減に合わせた賃金の削減及び②雇用契約の停止が可能となった。①については最大期間が 90 日、②については 60 日となっている。

	労働法	暫定措置
在宅勤務	在宅勤務すること、在宅勤務時の費用負担等を、事前に雇用契約書で規定する	雇用契約書での規定不要 (雇用人の指示で可能) 48 時間前に労働者へ通知 在宅勤務の費用負担についての合意は在宅勤務開始後 30 日以内でよい
年次有給休暇	1 年間の勤務後に付与される 休暇 30 日前に労働者への通知が必要 給与 3 分の 1 の金銭の付与は休暇の 2 日前までに支払う	1 年間の勤務前に付与可能 48 時間前に労働者へ通知 給与 3 分の 1 の金銭の付与はクリスマスボーナスの支払期限までに支払えばよい
集団休暇	開始 15 日前に労働組合及び労働局へ通知。年に 2 回まで、それぞれ 10 日以上	労働組合及び労働局への通知不要 48 時間前に労働者へ通知 2 回以上可能、最低休暇数もなし
時間外勤務時間の振替制度 (Banco de horas)	個別合意の場合は 6 か月以内の相殺。労働組合との協約がある場合は 1 年以内の相殺	個別合意で緊急事態終了後 18 か月以内の相殺が可能 事前に休暇を付与して、それを将来の労働時間と相殺できる

賃金の削減又は雇用契約が停止された労働者は、賃金補償として、一定の金額を政府から受け取ることができる。①及び②ともに、一定の場合には労働者との個別合意で実施できるとされているが、労働者との個別合意による賃金の削減や雇用契約の停止は将来的に裁判所で効力を否定される可能性があるため、いずれの場合も労働組合と協約を締結しておくことが望ましい。①の場合も②の場合も、それぞれの措置の終了後、労働者は賃金が削減された期間又は雇用契約の停止期間と同じ期間、雇用が保証されると規定されているが、雇用主は一定の補償をすることで正当事由のない解雇も可能となっている。

上記各暫定措置のほか、2020 年法 13,979 号という法律により、新型コロナウイルス感染症に関する休職 (隔離、検疫、医師による強制的な診察等) が有給の欠勤と取り扱われることになった。

4. 行政・司法手続き

多くの公的機関においても在宅勤務が実施されている関係で、各種の手続きに通常以上の時間がかかっている。また、裁判所、公正取引委員会 (CADE)、知的財産庁 (INPI) など多くの公的機関が、一定期間の手続き期限の延長や手続きの停止を決定している。

5. 個人情報保護法

個人情報保護法 (2018 年法 13,709 号) は 2020 年 8 月の施行予定であるが、本稿執筆時点で施行時期の延期が議論されている。

タックス トランスフォーメーション



マリエニ・コウチーニョ
(KPMG サンパウロ
事務所
パートナー)



吉田幸司
(KPMG サンパウロ
事務所
パートナー)

ブラジルでもコロナウィルス感染拡大の状況下、政府による景気対策も議論されているが、当該記事の作成時点 (2020 年 3 月 24 日時点) では、税務に関する措置はまだほとんど公表されていない状況である。

サンパウロ市で外出自粛要請が発令され、多くの企業が在宅勤務を余儀なくされ、この困難な状況を克服すべく多くの企業が今までの業務の見直しを検討するものと思われる。そこで、今ブラジルで起きつつある税務業務の効率化、高度化に資する可能性もあるタックストランスフォーメーション (税務業務のデジタルトランスフォーメーション) の動きについて述べていきたい。

テクノロジーの発展はビジネスの世界に重要かつ目に見える形で変革をもたらしている。新たな企業が誕生し、より多くのものを、より良く実行する事を証明して既存のビジネスモデルへチャレンジしている。伝統企業は成功を持続するため、デジタルなマインドセット、イノベーションといったことを企業文化に取り込むという、今までになかった視点に立った変革への取り組みを行いつつある。

ブラジルの税務当局、特に連邦当局は、電子化に関して言えば世界の中で先進的な機関の一つとして知られている。また、州レベルでは、電子インボイスやその他の付随書類は、完全ではないにせよ、ほとんどデジタル形式で提出されており、また簡単に参照可能である。税務当局は膨大な量の電子データ (ビッグデータ) の処理及び分析のためにテクノロジーを駆使し、自動的に評価及び調査を行っている。

一方納税者側は、税務コンプライアンス遵守にあたって、ブラジルでは、多くのことが電子的に実施されるため、法定期限内にすべての情報の整合性が取れた上で申告・納付するシステム整備・運用に追われている。

さらに、現在の税務部門への期待は、ブラジルでも過去のものとは異なってきている。税務部門・責任者に対して税務コンプライアンスだけではなく、現在は会社へ付加価値を提供することも期待されており、タックストランスフォーメーションは、税務専門家が自らの目標、戦略、構造を見直す機会となるものといえる。

多くの企業では現状分析及び課題の把握までは実施されるが、包括的なトランスフォーメーションプロジェクトを実行す

る予算が無く、財政上のメリットをもたらす分野のみに焦点を当てたプロジェクトを選択する事が多いといえる。つまり、一般的にはプロセスの自動化、罰金低減のための税務戦略、税務クレジットの回収の検討など目の前にある課題を解決するソリューションといったことから始まる。

こうした課題解決策から取り組むこと自体は特段問題があることではないが、企業は最終的に達成すべきゴールをしっかりと持ち続けることが重要である。その意味では、たとえスローペースであっても、不必要な労力を回避し前進を確かなものにするためには、トランスフォーメーションへのロードマップを持つことが重要である。

また、最初の一步の一例として、データレイクを作成することも考えられる。多くの場合、税務書類は整理された形で保存されておらず、またアクセスも容易でなく、更には紙で保存されている情報も多いことから、データの有益な活用がされていないケースが多く存在している。どのようなデータを会社が保有しているかを一度整理してみるのもいいかも知れない。

また、納税者は税務当局が求める情報及びレポートを提出するために多大な労力を要しているが、そうして作成されたデジタルなデータを戦略的な情報として活用し、データ&アナリティクス (D&A) を通じて予測分析及び将来への計画で活用することも考えられるが、これは時間がかかる話にもなる。

一方、このような今までにないことを実行する場合、必ずと言っていいほど変革に対する内部抵抗勢力が存在することから、企業文化及び実行責任者のプロファイルには注意を払う必要がある。

中には企業のトランスフォーメーションに手を貸すことは将来的に自分・同僚の仕事を奪うことをしていると思う者もいるであろう。こうした疑念が生じる余地を生み出さないためにも、プロセスを進める際には明快なコミュニケーション及び透明化が重要となる。さらに従業員に新たに求められるスキルを身につけられるよう研修を実施することも重要である。

今後タックストランスフォーメーションの動きが加速するとも考えられ、この世界一複雑な税制と言われるブラジルでビジネスを続けるためには、近い将来必ず検討すべき課題の一つとなるであろう。

サンバの魅力に 憑りつかれて四半世紀



木幡昌敏
(バランサのコックリー)

サンババンド「バランサ」を始めてから今年で28年。人生の半分以上をサンバ絡みで過ごしてきたことになる。だからといってそれを誇らしく思うかというとそうでもなくて、随分と偏った音楽生活を送ってきたなと思う。なぜそんなにサンバが好きになったのかと質問されることがこれまでよくあった。日本でもブラジルでも。その時々頭に浮かんだ答えを無理やり返してきたが、常に一つの正解があったわけではない。どこが面白いのか探りながら確かめながらサンバと接してきたように思う。

これまでを振り返ればサンバの魅力を説明できるのだろうか。大学2年生だった1991年に初渡伯したことがサンバとの出会いだ。それまでもサークルで真似事はやっていたが本当の出会いとは言えない。恐ろしいことに当時の学園祭での演奏の様子を収めたビデオテープが奇跡的に残っていたりして、それを見返した時はあまりの内容に仰け反った。何も知らないってことはある意味強みでもある。大してポルトガル語も分からず初の海外渡航にブラジルを選ぶあたり、のちにバランサと一緒に作ることになる先輩デンと自分はある頃、楽観的で強かったのかもしれない。

サンパウロで知人宅に宿泊させてもらいサンバのライブを見てみたいとお願いしたところ、夜通しやっているライブハウスに連れて行かれた。取っ替え引っ替えバンドがドンドン出てくるスタイル、しかも朝までノンストップ。色々と衝撃を受けた。あくまでもお客さんを楽しく踊らせたり歌わせたりすることを目指しているの、反応が悪いとさっさと曲を変えて別の展開にもっていったり、この辺りが盛り上がり潮時と見るや機械でボリュームを絞るんじゃなく人力で演奏をフェードアウトしてみたり。素晴らしいプレイや上手な歌を披露して見せつけてやろうという気があまり感じられない。その場を盛り上げることに徹している。巧みにお客さんを巻き込みながら。しかも自分達もちゃっかり楽しんでいる。これは今まで聴いてきた欧米中心のショービズとしてのミュージックシーンとは一線を画した世界だった。作り込んだプログラムを忠実にこなしていくのではなく、道のりはどうであれなんとかゴールにたどり着く。この辺はサンバ気質というよりはブラジル人気質と見ることもできそうだが、この時感じたドキメキでサンバにぐぐっと惹かれていった。その後本場リオに行く。その頃は全く知識がなかったのによくわかってなかったが、とても有名なサンピスタ達

のライブをいくつも見た。そこでもやはり非アメリカ的なサンバの音楽性に引き込まれていった。たくさんの登山家がとてつもなく高い山を目指して登っているのがジャズやクラシックだとしたら、簡単に辿り着けそうなだらかな丘の上でみんながワイワイ楽しく遊んでいるのがサンバに見えた。

実際はその丘は決してだらかなんかではなく、丘の上でずっと前からいらっしゃる皆さんの輪に合流するまでには相当な時間がかかるのだが。とにかくこの最初のサンバ体験で、やる側と見る側の距離の近さというかステージとの垣根の低さからくる親近感みたいなところが大好きになってサンバをやるぞと決意したのだ。帰国後知り合いのつてを頼り、各大学のブラジル音楽サークル所属の腕に覚えのある猛者たちを集めてバランサを結成する。自分たちでいうものなんだが、演奏能力はそこそこあったので練習やリハーサルを重ねていくうちに、ある程度人前で演奏できる形になり、ライブ演奏をやり始めた。しかし実際やってみると良くないというわけではないけれど何か足りない。サンパウロのサンバ小屋で見たあの感じが出せない。演奏の良し悪しだけでは計れないサンバ特有のドキメキ要素を見つけるために、そこからまがき始めることになる。

当時はインターネットが普及する以前の時代だったので、音源といえば数少ないレコードか海賊版のカセットテープを聴き漁るだけ。自ずと毎年のようにリオに向かい、現地で生のサンバに触れることで何かを吸収しようとした。その後たくさんの時間を掛け多くの人の力を借りながら数々のサンピスタたちと関係を築く。サンバのスター達をゲストに迎え現地でレコーディングをすることもできた。

そんな経験をする中でサンバの魅力とは何なのかを少しずつ確かめてきた。じゃあそれってなんなのよ？と問われると言葉にするのは難しい。バランサは2年ほど前からポッドキャスト番組を配信している。ブラジルのことサンバのこと音楽のことなどを自由に語っているのだが、その中で相棒のデンが言ったことがひとつのヒントになるかもしれない。サンバを志す者、真のサンピスタになるために必要な条件を三つ挙げるとしたらこうであるとぶち上げた。「強さ、謙虚さ、明るさ」。もはや音楽的な言葉ではないところにサンバの奥深さがあるんじゃないかと妙に納得した。サンバはただの音楽じゃなくて人生哲学なんだと語りかける名曲は数多い。



ペルナンブーコ州ペトロリーナ奮闘記

唐木グラッサ
(会社員)

私は、夫が駐在するペルナンブーコ州のペトロリーナに約3年間住んでいた。ペルナンブーコ州の州都レシーフェから飛行機で約1時間飛ば、セルトンと呼ばれる灼熱の乾燥地帯。ペトロリーナは、乾いた大地に流れるサンフランシスコ河沿いの地の利を生かした灌漑農業によって、マンゴーやブドウの一大産地として発展した街であり、日本の友人は勿論のことサンパウロ在住の日本人ですら知らないマイナーな所である。

現地での生活は非常に不便だった。電車は通っていない上に、バスや流しのタクシーもろくに走っていない。ブラジルの免許を持たない私が出かける手段は、ひたすら徒歩。夫の出勤後は何か習い事でもと考えたが、市内には語学学校もカルチャースクールもほとんどない。何より駐在員家族が他にいなかった。話相手がいなかった。

特に困ったのは「食」である。現地のスーパーには、サンパウロで見かけようなお惣菜は見当たらないし、野菜やお肉は既に鮮度の悪いものがあり、蠅が飛んでいることも珍しくない。週に1度、日系3世が営む青果店に行くことが唯一の楽しみだった。店では、サンパウロから多くの日本食材を取り寄せていたが、運が悪いとモヤシは腐りかけ、こんにゃく等の加工食品はボロ

ボロ。貴重な納豆は多めに買って、冷凍庫にストックして大切に食べた。

とはいえ、嫌な事ばかりだったわけではない。食事は自分でもなんとかしようと心に決め、小麦粉から餃子の皮を作ったり、小豆からあんこを炊いたり、大豆とにがりて自家製豆腐をこしらえたりして工夫した。日本ではスーパーで買う方が早いので、このようなことは決してしない。置かれた環境のおかげで、料理の腕はみるみる上達したと思う。

思いきって外に出ると、面白い経験も沢山できた。夫の上司の厚意で職場にお邪魔すると、現地の従業員は温かく迎えてくれた。習い事は、自宅近くの個人のピラティス教室に飛び込み、元気なお爺さん・お婆さん達に囲まれてトレーニングに励んだ。知り合った日系人農家の中庭で突然羊の解体ショーが始まり、釘付けになったこともある(頂いたステーキは大変美味だった)。

思い描いた駐在とはかけ離れていたが、地元の人々との交流や貴重な経験は、間違いなく私の価値観を変えてくれた。本帰国して便利な生活に戻ったが、今でもペトロリーナという街とブラジルという国には、心から感謝している。

ジャーナリストの旅路

お父さんが新聞記者を辞めたわけ

朴 鐘珠
(毎日新聞元サンパウロ支局長、ブラジル在住)

4人の子どもたちへ。君たちは今年それぞれ13歳から4歳になる。私(お父さん)の転勤で一緒にブラジルへ引っ越し、6年が過ぎた。私がどうして新聞記者を辞めてブラジルでラーメン屋を始めたのか、理由を話しておこう。

店の客から「なぜ移住してきたのか」と尋ねられる度、私は「日本は民主主義国ではない。子どもの明るい未来が描けなくなったから」と答える。その返答に誰もがちょっと困惑する。だからもう少し説明したいのだが、レジでの支払いの最中に政治談議をしている暇はない。2分もしないうちに次のラーメンが茹で上がってしまうからね。

私はいま44歳。島根の田舎町で育ち、学生時代にはアメリカの大学院でジャーナリズムを専攻した。ジャーナリズムとは、世の中の不条理を許さない正義感のことを指す。君たちもいずれ否応なしに気づかされるだろうが、人間はとても身勝手な生き物だ。自分さえ得をすればいいと、悪巧みする者がいつだって現れる。そういう奴らは決まって人の上に立つとする。他人の生き方や地球の自然を思い通りに操る力、つまり権力を欲しがらるのだ。

ところで歴史上、最良の発明は何だろう。私は民主主義だと思う。一人ひとりが平等に扱われ、意思が尊重される社会

の仕組みだ。権力者が不条理な手口で民の尊厳を脅かすと、民主主義が壊される。それを防ぐのがジャーナリズムの役割だ。新聞や雑誌、テレビといったメディアは業界で一丸となり、権力の横暴を監視、阻止する責任がある。

しかし残念ながら、日本のメディアはジャーナリズムの使命を果たしていない。原因は、そもそも社会にジャーナリストが育つ素地がないからだ。毎日新聞で働いた私と、NHKで働いたお母さんは、批判精神のない同僚や上司を大勢見てきて、そう結論づけた。日本では、幼いころから学校で集団行動が教え込まれる。個性はつぶされ、物言わぬ子羊が大量生産される。そんな同調圧力が蔓延する環境で、ジャーナリストが育まれないのは当然だ。ジャーナリズムが機能しないなら、民主主義が実現するはずもない。現にメディアは安倍政権の独裁化を止められなかったではないか。君たちが生きる今後数十年、日本が暮らしやすい国に発展する期待はゼロだと、私たち夫婦は見限った。

こうして私のサンパウロでの任期終了を機に、愛着のあるペンを置き、みんなでブラジルに残ったわけだ。6人が食いつなぐ術として、第二の人生はラーメン屋しか選べなかった。でも君たちには、無限の可能性が広がっている。

ジョアン・カブラル・デ・メロ・ネト 生誕100周年を迎えた外交官詩人に改めて脚光

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

「セヴェリーノの死と生」▶
映画ポスター



生誕100周年

外交官詩人ジョアン・カブラル・デ・メロ・ネトが亡くなったのは1999年10月9日であったが、この大詩人がレシーフェで産声をあげたのは1920年1月9日だ。従って今年は生誕100周年となる。という訳で、この機会に、彼の業績を再評価する機運が盛り上がってきている。例えば、最近多数発見された、彼の未発表作品（詩や散文）は現在整理・編纂中で近々のうちに新刊として刊行されることになっており、さらには本格的な評伝が二冊も今年中に刊行予定となっている。

この生誕100周年に関しては、ブラジル各地の新聞・雑誌で特集記事が組まれ、TVでも関連番組が放送されている。1月から2月にかけて、出身地レシーフェはじめノルデスチ各地の地元新聞は当然だが、リオやサンパウロの主要紙はもとより、ロンドリーナ（パラナ州）やポルトアレグレの地元紙でも大きく取り上げられていた。このように広範囲にわたって文芸ジャーナリズムが反応したのは、彼の作品が今でもブラジル人の幅広い層に読み継がれているからだ、といっていよい。

今回は久しぶりに再読したジョアン・カブラルについて、私的メモを重ねてみたい。

ジョアン・カブラルとは

高校用歴史教科書『ブラジルの歴史』（邦訳版、明石書店）では、「近代主義運動に始まった時代に終止符を打ち、新たな潮流の幕開けを画した詩人」と記されており、哲人歌手カエターノ・ヴェローゾの主著『熱帯の真実』には「モデルニズモ以降、ブラジル最高の詩人」と書かれ、さらには、ポルトガル語圏の現役作家では一番アクティブな活躍を続けているモザンビーク人作家ミア・コウトによれば「ジョアン・カブラルはポルトガル語圏では最も優れた詩人である」となる。

ノーベル文学賞候補と目されたこともあった彼は、文芸批評家が「ネオ・モデルニズモ」と名付けた新潮流をリードした詩人であったが、本業は外交官で、任地はスペイン（バルセロナ、セビリア、マドリッド）、ロンドン、ジュネーブなどを経てセネガルやホンジュラスでは大使を務めていた。そんな多才な彼の全体像をつかむには紙幅もないので、本欄では、彼の作品の中で最も広く読まれている詩劇で、今もロングセラー（累計販売部数は20万部以上）となっている『セヴェリーノの死と生』に焦点を当てたい。

『セヴェリーノの死と生』の冒頭部分（拙訳）

俺の名はセヴェリーノ
名字などない
セヴェリーノっていうのは
巡礼者の聖人なんで
同じ名前の奴がやたらと多い



それでセヴェリーノ・ダ・マリア
と呼ぶようになった
でも母親の名がマリアという
セヴェリーノなんていくらでもいるから
亡くなったザカリアスのマリアの
セヴェリーノとなったんだ
これでも言い足りないな
このセズマリア（植民地期からの封与地）の
いちばん古い大地主は
ザカリアスという名前だったので
今じゃあザカリアスさんが何人も
教区内にいるんだ
それじゃあ、読者方に今話している俺は
つまりなんていうんだ
そう、パラíbaとの州境にある
コステラ山脈生まれの
ザカリアスのマリアのセヴェリーノで
ございます

多数のセヴェリーノが意味するもの

この詩劇の主人公セヴェリーノは、ヘチランチと称される早魃難民で、干乾びた奥地から逃れて州都レシーフェへ歩いて移動する苦難の旅をモノローグで語っていく。途中で出会った簡素極まりない葬送（ハンモックにくくられた遺体を二人の仲間が担ぎ、未亡人が同伴する）の死者の名もセヴェリーノ。ようやくたどり着いたレシーフェでも墓堀人夫の「死者の数が多すぎて、俺たちの仕事は忙しすぎる」というぼやき声を聴きながら、セヴェリーノは街中を彷徨していく。街の中心を流れるカピバリーベ川に架かる橋から身投げしようか、とまで悩むセヴェリーノに知人となった大工が、語りかける。「君に何と応えたらいいか 俺にはわからない 言葉だけで人生を肯定するなんて難しい 人生は人生そのものが答えなのだ」というのが、この長詩（単行本で180頁ほど）の最後の部分である。多くのセヴェリーノたちの、干乾びた人生は、「生と死」ではなく「死と生」なのだ、と格差社会ブラジルの現実をヴィジュアルにとらえた社会批判詩であった。

この初版本が刊行されたのは1955年であったが、その10年後、サンパウロのカトリック大学劇場で上演され、またフランスのナンシー演劇祭で入賞したことから認知度が急速にアップ、さらに1977年ゼリト・ヴィアナ監督によって映画化され、1981年にはグローボTVがドラマ化（名優ジョゼ・ドゥモンと歌手エルバ・ハマリョが好演）したおかげで、ブラジル国民全般に広く知られることになった。

実は、元々シュールリアリスト詩人であったジョアン・カブラルが社会派リアリズムに転じた背景として、時代（マッカーシズム）の犠牲者として二年間停職（無給）処分を食らった、というファクトがあるのだが、この辺については新しい評伝で詳しく語られるようである。

2019年 GDP成長率の発表

3月3日のブラジル地理統計院（IBGE）発表によれば、2019年のブラジルの実質GDP成長率は+1.1%、名目GDPは7兆3,000億レアル、部門別では、農業+1.3%、工業+0.5%、サービス+1.3%であった。

2020年 GDP成長率予想

コロナウイルス不況の見方は日々厳しくなってきているが、2020年度のGDP成長率予想については、4月8日時点の政府（中銀）予想は▲1.18%であるが、4月12日付けヴァロール紙によれば、最新の世界銀行による成長率予想は、ラテンアメリカ全体で▲4.6%、ブラジルについては▲5%（ちなみに2021年は+1.5%、2022年は+2.3%）である。

コロナウイルス感染状況、そしてボルソナロ大統領にイエローカード

ブラジルで最初のコロナウイルス感染が確認されたのは2月25日。イタリア出張から帰国した男性が感染確認者第一号であったが、感染者数は3月に入ってから急速に増加し、サンパウロ、リオといった大都市ばかりか、ノルデスチはもとよりアマゾン地域を含む内陸地方へとブラジル全土に広がっている。居住区に住む先住民インディオにも死者が出ており、4月14日現在のブラジルにおける感染確認数は25,262人、死者は1,532人となっている。（尚、死者の性別では男性

58.9%、女性41.1%、年齢別では60歳以上が74%、持病併発者率は75%である。）

コロナ感染対策（社会的隔離策）では出遅れた米国（カリフォルニア州は3月19日から、ニューヨーク州は3月22日から）から更に数日遅れで、サンパウロ州が非常事態宣言による外出自粛令を発令したのが3月24日で、他の州も相次いで外出自粛令で同調し、連邦政府（保健省）も社会的隔離の必要性を訴え、経済省は勤労者・企業への緊急支援策を打ち出している。この非常事態に真摯に対応せず、錯乱的言動で社会的にも政治的にも墓穴を自ら掘っているのが、ボルソナロ大統領だ。「コロナウイルスはマスコミが大騒ぎし過ぎたもの」、「コロナ感染を誇張するヒステリー」、「外出自粛、学校の休校、商店閉鎖などは全く必要ない。コロナ感染者の90%は無症状であり、軽い風邪（gripezinha）でしかないのにマスコミが重症と煽っている」

こうした軽率発言と並行して、取り巻き支持者たちと濃密接触を繰り返し、さらにはコロナ対策で先頭に立っているマンデッタ保健大臣を解任する寸前（4月7日）までいったため、元々の支持層である保守派政治家たちも「国の統治者としての資質ゼロ、ただの愚か者に過ぎない」とボルソナロを激烈に批判するに至っている。

4月3日付け世論調査（ダタフォーリャ）によると、マンデッタ大臣支持率76%に対し、ボルソナロ支持は33%と、国民の大多数も「ボルソナロは統治能力なし」と判断しているのが現状である。

バスの中で

伊與部洋樹
（東京外国語大学4年）

今にも壊れそうな硬いシートでお尻が痛い。車内は落書きだらけだなあ、などと考えていると減速用の小さい丘に乗り上げ、身体が宙に浮く。パイア州、サルヴァドールのバスは実に粗削りである。坂道やカーブでも容赦ない豪快な運転は、下手なアトラクションよりスリルがある。焼けるように暑いこの地で、ラッシュ時の「満員バス」に乗りようものなら、多少の覚悟が必要だ。頭がボーっとするほどの熱気の中、「降りますー！」の声は、日本の満員電車より心なしか必死である。

そんなことを考えているうちに、商売の中心地へ入る。「おい、“パイロット！”ドア開けてくれ！」運転手が出口専用のドアを開けると、テーブルを何重にも巻いた保冷ボックスを携え、汗まみれの男が車内に入ってくる。突然始まる車内販売は日常茶飯事だ。どれも超格安で買えるものばかりで、「1レアルくらいなら…」とつい手にとってしまう。

時には、疲れた老人が、自らの生活の困窮ぶりを訴えてお金を乞うたり、キャップと金色のネックレスでバッチリ決めた若者が、自作のラップを披露しておひねりをもらったりする。

「ありがとう、“パイロット”。ありがとう、車掌。神の

ご加護を。」

彼らはそう言って握手し、ささやかなお礼として、運賃のお釣り用の小銭を両替する。他人の親切を「しめた」と当たり前のよう利用するのではなく、素直にお礼を言い、笑顔で応える愛嬌に心が温くなる。

「北東部は“無視された地域”だよ。」ある日、下宿先の家主が語った。1レアルのアイスを買って生活する人から、プール付きのマンションの最上階で一日中パーティーをする人まで、様々な層が住むサルヴァドール。そんな格差と混沌の街を走るバスは、マイペースにあらゆる人々を運ぶ。バスカードのチャージエリアの行列は、いかにバスが愛されているのかを物語る。

「あんたどこ行くの？どこで降りるのか分かる？私次で降りちゃうから、車掌にあんたのこと助けるようお願いしとくね。」

市内を縦横無尽に駆け巡るバスには、ちょっと無責任なガイドまで同乗している。車内で居合わせる人々は、まるでサルヴァドールの気候のようだ。暑暑いくらいにお節介だが、どこかクセになり、いつの間にか恋しくなる。私が大好きなサルヴァドールのバスは、その中で繰り広げられる多様な人間模様があってこそである。

新刊書 紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『移民と徳 日系ブラジル知識人の
歴史民族誌』（佐々木剛二著）

「ブラジルの日本移民たちが行うローカルな知識実践に着目しながら、人々が知識を通じて発現させた行為主体性を理解することを試みる」と序文に記した著者は、勝ち負け抗争を経て土曜会・サンパウロ人文研に集結した日系知識人たちの活躍の事例を子細に考察し、これを「移民的徳の誕生」と捉え、さらに移民史が70年史、80年史から百年史となるにつれ、その叙述を巡って様々な齟齬・亀裂が生じた経緯を「生き証人」として記録している。

（名古屋大学出版会 2020年2月 390頁 6,300円＋税）

『ブラジルの都市の歴史』

（中岡義介、川西尋子著）

共著者による『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』（鹿島出版会、2014年）に次ぐ、ブラジル都市史研究の第二弾。植民地時代から20世紀

前半までのブラジルの諸都市（リオ、レシフェ、ウライなど12都市）の形成史と建築様式の特徴を一次史料を読み込みながら叙述した部分はオーソドックスであるが、終章におけるコルビュジエ批判（ブラジルの過去の知的資産を剽窃しリメイクしただけ、との強烈な批判）は実に polemical だ。

（明石書店 2020年1月 402頁 4,800円＋税）

『ブラジル・カルチャー図鑑 改訂版』
（麻生雅人・山本綾子編著）

ファッション編、アート・民芸品編、建築・都市編、食・飲み物編、祭り・踊り・音楽編、に分けて多様なブラジル文化のアップデート情報が網羅されている小百科だが、今回の改訂版（初版は2012年）では、2014年ワールドカップ関連記事などを削除し、大自然の絶景観光情報や都市別ライフスタイル事例が加筆され、さらには日本で入手できるブラジル食材雑貨店やブラジル料理店のリストも掲載されており、なんとも便利な一冊だ。

（スペースシャワーネットワーク 2019年12月 176頁 1,800円＋税）

『ラテンアメリカ研究入門』

（松下列著）

ラテンアメリカ研究となっているが、本書で論及している事例はメキシコとブラジルのみであり、副題にある＜抵抗するグローバル・サウス＞のアジェンダ、に関する著者の考察が論述されている。新自由主義的グローバル化が民衆の生活に与えた諸困難を再確認し、民衆が主体的にその諸困難にどう立ち向かったか、という視点から、「左派」政権の「挫折」と教訓をメキシコとブラジルの事例から復習し、オルター・グローバル化を構想している。

（法律文化社 2019年12月 230頁 2,600円＋税）

『大豆と人間の歴史』

（C・デュボア著、和田佐規子訳）

今や巨大化した大豆ビジネスを農業経済の視点から論じるだけでなく、歴史的背景や環境問題にもきめ細かく目配りしながら、その功罪両面を冷静に論じている。もちろんブラジルの事例も。すなわち、セラード開発の結果ブラジルは大豆生産でも米国と肩を並べる大生産国となったが、その開発に関与した日本の進出の遠因はペルー沖のアンチョビー大不漁（による飼料不足を恐れた米国による大豆の対日輸出中止）にあったのだ、と記している。

（築地書館 2019年10月 376頁 3,400円＋税）

!!「ブラジルあれこれ」!!

BRASIL para principiantes

本誌2019年9月号の本コラムでは、アントニオ・カルロス・ジョビンが述べたと伝えられる“Brazil is not for beginners”を紹介したが、ジョビンの言葉のきっかけとなったと言われるハンガリー出身のピーター・ケルメン（Peter Kellemen）の著書『BRASIL para principiantes-VENTURAS E DESVENTURAS DE UM BRASILEIRO NATURALIZADO』第5版（1962年）を入手し、読んでみた。

本書は1961年に初版が発行された後、ブラジル社会の大反発を招いたと伝えられる。何が書いてあるのかと興味津々で読み始めたが、その内容は、外国人、それもヨーロッパ人の目を通じるブラジル社会の考察といえるもので、時代は少し古い（1950年代）が、ブラジルで生活した人なら大方が思い当たることばかりである。基本的スタンスとして、ブラジルで生活するコツを教えてください、と。多少茶化している節もあり、なかなか面白く読んだ。逆にブラジル人（といっても元外国人またはその子孫）にとっては、ヨーロッパ人の上から目線という反発は当然あったろう。

Um “jeito” + Um Agrônomo = Visto Consular

この最初の章では、ブラジルで生活する上で様々な問題を解決してくれる、いかにもブラジルの便法を表す言葉である“jeito”が紹介される。

物語は、ケルメンをモデルにしたと思われる人物（文中では、Paulo Kenedy）がブラジルの永住査証をとるためにパリのブラジ

ル公館を訪れるところから始まる。職業を聞かれ、医師と答えるが、なんと、法律に基づき厳格な職務執行を求められるはずの担当領事から信じられない言葉が飛び出した。領事は、在留資格の「医師」は定員の問題やその他いろいろあるので、「農業技師」なら即刻ビザを出せと言う。しかしそれでは、虚偽の申請として後々問題にならないかという当然の懸念が生じる。これに対する領事の説明は、「これはあなたが手続きなどでこれ以上無駄な時間を過ごさなくていいようにとの自分の配慮による“jeito”である。」というものであった。領事は、このような“jeito”（便法）は、ブラジルでは、入管関係の立法に携わった人を含め支持しない人はなく、よって大きなリスクとはならないと考えている。

ブラジルで生活していると、例えば銀行の手続きが壁に直面し、解決策がなかなか見つからず、ついに個人的に銀行に乗り込み交渉するなどということがよくあるが、そのような場合、GERENTEが出てきて、“Não se preocupe. Deixe-me dar um ‘jeitinho’.” などと助けてくれることがよくある。法や規則を個人の裁量で無視したり曲げたりすることは、コンプライアンス重視の昨今ますます難しくなっていくのだろうが、あまり規則にとらわれず柔軟に考えるという精神は生きていて、それがブラジルの魅力につながっているとあらためて感じている。

最初の章を紹介したところで字数が尽きた。本書にはまだまだ面白い話が満載で、今後とも本コラムで紹介していきたい。（MK）



日本ブラジル中央協会 — イベントのご案内 & お知らせ —

イベントのご案内

以下のイベントを予定していましたが、
コロナウイルス蔓延の状況が収束するまで延期します。

長谷川勝彦 日東珈琲株式会社(Cafe Paulista) 社長
ランチョン・ミーティング

日 時：2020年6月以降（未定）
場 所：シーボニア・メンズクラブ
住 所：千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル1F

八木繁和 ブラジルYKK農場 初代農場長
ランチョン・ミーティング

日 時：2020年6月以降（未定）
場 所：シーボニア・メンズクラブ
住 所：千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル1F

日本ウジミナス記念シンポジウム（ラウンドテーブル）
演 題：「ブラジルに賭けた製鉄の情熱
— 清算で振り返る その歴史的意義 —

日 時：2020年6月以降（未定）
場 所：新橋ビジネスフォーラム

春期ポルトガル語講座について

春期講座は、5月7日からオンラインなどを利用し、順次開講します。
詳しくは、協会HPを参照下さい。ご質問等ございましたら、
メール(info@nipo-brasil.org)にてお問い合わせください。

皆様のご入会を心よりお待ちしております

法人・個人・学生

新規会員募集中

会員数 法人会員 約120社
(2020年4月現在) 個人会員 約400名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」
にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、
参加できます（会員限定イベントへも参加いただけます）
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

※入会金は不要です

お申し込み



《日本ブラジル中央協会公式HP》
https://www.nipo-brasil.org

日本ブラジル中央協会

検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。

ブラジル産

最高級プロポリスを

ギューツと
限界までつめこみました。

日本・ブラジルの研究機関で共同研究

ブラジル産プロポリスには有効成分が豊富に含まれています。
ブラジルと日本の各大学で共同研究し、有効性の高い
プロポリスを厳選して使用しました。

カラダを守りたい
こんな場面で

病院の待ち時間

人混みの中

いつでもどこでも
気軽にプロポリス。

無香料 無添加

AF-08 プロポリスキャンディー [25粒入]

価格 1,944円(税込) 送料 200円(税込)



株式会社アマゾンフード

AMAZON FOOD INC.

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町 3-1-8-2F

お電話でのご注文
サイトでの
ご注文
メールでの
ご注文

03-5355-7360

受付時間：10時～16時（土・日・祝日を除く）

www.amazonfood.co.jp/shop/

info@amazonfood.co.jp



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を

ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイシア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイシア) 運営: 株式会社 漢和塾

〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716

お問い合わせは

E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

39年間
南米一筋

驚き! 感動!!

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業1979年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、アメリカン航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、
イベリア航空、ブリティッシュ・エアウェイズ、ターキッシュエアラインズ、エミレーツ航空、カタール航空、
アエロメヒコ航空、ラタム航空、ニュージーランド航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル

(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号

社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員

TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail: info@alfainter.co.jp



「あ!ここにも。あそこにも」私たちの生活は大小さまざまなカタチの鉄に支えられている。それもそのはず。実は地球の重量の約1/3が鉄なのだから。3500年以上前から、この身近な素材を使うことで進化してきた人の暮らし。今だって柔らかな鉄、軽い鉄、小さな鉄…。鉄の可能性は広がり続け、人の暮らしの可能性も広がり続けています。



新日鉄住金は日本製鉄へと社名が変わりました。